

意味とシンタックスの協働的構築

——構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(3)——

0 コミュニケーションとコラボレーション

言語学の、ことに統辞論においては、「文」と「^{シンタックス}統辞」は密接にむすびつくものとかんがえられてきた。すなわち、「文」とは、シンタックス的に完結したものをさすのである。そして、その「文」の表出する《意味》は、シンタックスの産出者である「話し手」がほしいままにできるものであり、産出されたシンタックスそのものも「話し手」のもものとされてきた。このてんにおいて、言語学における「文」とは、とりもなおさず「個人の発話」にはかならない。

だが、つぎの Lerner(1991)の例がしめすように、じっさいの発話においては、ひとつの「文」を、コミュニケーションの参加者たちが^{コラボレーション}協働により完成することはめずらしくない。

- (1) Marty: Now most machines don't record that slow. So I'd wanna- when I make a tape,
Josh: be able tuh speed it up.

このことが示唆するのは、「文＝個人の発話」ではなく、コミュニケーションの参加者たちによるコラボレーションの産物だということであろう¹。このようなシンタックスにおける協働、すなわち「共発話者にひらかれた発話」にかんしては、すでに、Lerner(1991)(1996)(2002)(2004a)(2004b)、串田(2002a)(2002b)などの研究が存在するがⁱⁱ、言語学的にも語用論ではなく、シンタックスそのものに焦点をあてた統辞論的研究はまだ林(2005)などごくわずかであり、フランス語のシンタックスにおける研究もほとんど存在しない。

われわれはこれまで、コミュニケーションとは、コミュニケーションの場の参加者たちの「^{インタラクション}相互行為」によって、「その場的」に構築されていくものであるという構築主義的相互行為論の立場から、「記号」の成立における構築的性格を論じ(福島 2004a)、伝統的コミュニケーション観の「独我論的＝非相互行為」的性格について論じてきた(福島 2006)。この小論では、それらの論をふまえ、コミュニケーション成立の現場について思弁する。そのさい、ひとまず、コミュニケーションの「参加者」たりうるための条件について考察したのち、じっさいの会話コーパスを検討することで、コミュニケーションがいかに参加者どうしのコラボレーションにより成立してゆくのかをみたのちに、従来とりあげられてこなかったフランス語名詞句のシンタックスの相互行為的構築について考察し、もまた協働によってその場的に構築されるものであることをしめしたい。

1 対話者の本質

1-1 コミュニケーション参加者の条件

ひとびとのコミュニケーションがなりたつ条件とはなんだろうか？ まずは「話し手」と「聞き手」、すなわち、コミュニケーションの場の「参加者」 participant の存在であろう。では、そのばあい、参加者たりうる条件とはなんだろうか？ もちろん、ただちにいくつかの答えがかんがえうる。たとえば、以下のようなものだ。

- (2) a. コミュニケーション裡にもちいられている当該の言語を解する
- b. 理知的存在である
- c. 自律した意志を有している

(2)の条件は、いちいちもつともちがいない。当該の言語を解さねば、話し手の発した「言語表現」を解析することができず、理知的存在でなければ、その《意味》を解釈することができず、自律した意志を有していなければ、その返答のことばに《意味》をみとめうるかどうか疑わしいということになるからだ。だが、ある人物がこれらの条件をみたしているということは、どのようにして知られるのであろうか？

とつぜん見知らぬひとが部屋にはいってきて眼前にすわったとして、そのひとが(2)の条件をみたしていることを、われわれはただちには知りえないであろう。もちろん、知人ならば、そのような心配はない。眼前にいる「知人の形態をした人物」は、ふつう、じぶんのかんがえている知人そのひとのはずであり、それならば、(2)の条件をみたしているはずだからだ。だが、眼前にいる知人の形態をした人物がじぶんのかんがえている知人そのひとであるということは、いかにして確認できるのであろうか。もちろん、話してみればよいというひとがいるかもしれないが、相手が理知的存在かどうか確認できない以上、そのことばをただちに信ずるわけにはいかないであろう。たとえば、SF ホラー映画にあるような、凶悪なエイリアンが、なかまのだれかにも乗りうつっているというような「文脈＝シチュエーション」においてならば、見知らぬ他人や、さらには知人といえども、かんたんに話しかけたりはしない——むしろ、できない——のではないだろうか。

ぎゃくに、日常生活のようなふつうの「文脈＝シチュエーション」のなかであれば、われわれは、眼前の存在が(2)の条件をみたしているか否かを自問することもなく、見知らぬひとびともにはなしかけることができる。ちょうど、ヴィリエ・ド・リラダンの長篇小説『未来のイヴ』*L'Ève future* (1886) における青年貴族エワルド卿のように、たとえあいてが「人造人間」^{アンドロイド}だとしても——もつとも、エワルド卿は、人造人間であっても精妙に返答してくれることを知っていたのだが——である。しかしながら、この「日常」におけるばあいでも、われわれは——まさにエワルド卿のごとく——、あいてが(2)の条件をみたしているか否かを知ってはいない。そのけっか、じつは、あいてが「人造人間」であっても、ふつうの「人間」同様に話しかけてしまうのだ。じつは、われわれにとって、(2)の条件は、会話開始の条件ではなかったわけである。

これは、アラン・チューリングによる有名な「チューリング・テスト」*Turing Test* がしめしたことであった。これは、回答者 A と B、質問者 C がいたとして、C にはみえない場所にいる A と B に質問をすることで、A と B のいずれがコンピュータであるかをあてるテストである。そのさい、コンピュータは、あえて計算まちがいをしたり、返答まで間をあけたりするようプログラミングされている。このテストにより、人間とのちがいがわからないようにふるまったコンピュータには「知能」があるとみなしてさしつかえないのではないか、とするかんがえかたでⁱⁱⁱ、つまりわれわれは、対話者がコンピュータであっても、対話者がそれらしく反応すれば、そのコンピュータを人間とみなしうるということである。

このかんがえかたにたいしては、ジョン・サールが「中国語の部屋」*Chinese Room* という思考実験を提案し、機械的に反応するのでは「知能」とはみなせないと反論している。だが、質問者 C が、じつはコンピュータである A を人間であると「誤解」したまま、「A=コンピュータ、B=人間」という「真実」をあきらかにされることなく死んでしまったとしたら、C にとっては「A=人間、B=コンピュータ」こそが「事実」にほかならず、A は「知能」ある——すなわち(2)の条件をみたしている——存在にちがいないであろう。「真実」は、つねにそれを「認識する主体の裡」に存在しているのである。だが、はたして、それはほんとうで

あろうか？

1-2 対話者のありか

『未来のイヴ』において、エディソン博士は、人造人間ハダリーの「対話機構」について、彼女の内部にはおよそ 20 時間分の暗示的で蠱惑的なことばが録音されていると説明する。そのような装置で、じぶんの問いかけに人造人間はどうして返事が可能なのかと問うエワルド卿にたいし、エディソン博士は、「すべてが、すべてへの返事になりえるのです」とこたえ、「ころのなかで、話し手から色や調子をあたえられていれば、どんな語も、いつだってなんらかの意味でもって、あてはまってしまうものなのです」とのべている。さらに、おおくのことばは曖昧であり、その魅力や深みは、そのことばが答えとなるような問いに依存するのだと論ずる。つまり、人造人間はかぎられたことばしか話さないにもかかわらず^{iv}、それを対話者として聞くエワルド卿とのコミュニケーションは齟齬なくおこなわれるのであり、その理由は、エワルド卿の主観が、あいてのことばをじぶんのすきなように解釈するからというのである。

これは、うえてみたチューリング・テストのケースとにている。人造人間は、手持ちの有限の文のうちから、その場に関連ありそうな文を発するのみにもかかわらず、聞き手がそこに《意味》を付与してしまうのだ。じっさい、このかんがえかたを応用したプログラムは存在し^v、もちろんプログラムあいてと知ったうえで、対話をたのしむことができる。プログラムのように複雑なものではなくとも、ペットに話しかけるひと、サボテンに話しかけるひと、ぬいぐるみに話しかけるひとなども、おなじようなものであろう。もちろん、サボテンやぬいぐるみはなんのリアクションもしないであろうが、話しかけているひとの「内部」では、ちゃんとリアクションがキャッチされているのかもしれない。

ようするにこれは「独我論」世界のはなしである。話し手が語るためには、聞き手の内面は必要とされない。それは、話し手によってつくりあげられるのだ。そしてこのとき、(2)の条件は不問に付されてしまっている、というよりもむしろ、話し手のいなく「理想的聞き手」として、話し手裡に内面化されてしまっているといえよう。すなわち、このばあいのコミュニケーションは、じぶんと異なる他者との「対話」ではなく、もうひとりの自分との対話、すなわち「モノローグ」なのであり、じつは「コミュニケーション」とはいいたいものなのである^{vi}。

だが、現実の会話コーパスを検討すると、それはまったくあやまりであることがあきらかになる。とうぜんのことながら、聞き手は話し手の内部に存在するわけではなく、外部にあって、話し手とコラボレートする他者にほかならない^{vii}。そして、たとえば Traverso (1999)が指摘するように、コミュニケーションの場において、「聞き手」は聞きながらも、さまざまな情報を発信しており、「話し手」は話しながらその情報の「聞き手」ともなっている。つまり、コミュニケーションは、現場の参与者たちのコラボレーションによる「同時双方向的」なものなのであり、(2)の条件は、そのやりとり、すなわち相互行為インタラクションのなかで、双方向的に確認されてゆくものなのだ。

2 参与者の協働

2-1 発話の協働的構築

うえにのべたこと、すなわちコミュニケーションとは現場の参与者たちのコラボレーションであることは、じっさいの会話を観察してみるとよくわかる。この章では、じっさいの会話を記録したコーパス (corpus 資料体) を分析することによりその実態を確認したうえで、伝統的なコミュニケーション・モデルとは異なっ

た、「相互行為モデル」を提案したい。

なお、おおくの会話分析研究では音声部分のみを分析対象とするが、本稿では、以下の分析にみられるように、視線や身体動作も重要な要素としてとりあつかう。このため、会話コーパスにおけるトランスクリプション（文字転写）は二段でしるし、上段が発話内容、下段が視線と動作、そのほかの注釈をしめした。なお、視認性を考慮して、下段の文字色をグレーにしてある。また、トランスクリプション中の記号の意味はつぎのとおりである。

(3) トランスクリプションの記号

[オーバーラップの開始位置
]	オーバーラップの終了位置
=	連続する発話の文末および文頭に付され、両者のあいだが切れ目なく連続していることをしめす。
(数字)	括弧内の数字の秒数の間隙があることをしめす。
(.)	括弧内のドットの数（1 ドットあたり、およそ 0.1 秒前後）のわずかな間隙があることをしめす。
:	直前の音がひきのばされていることをしめす。コロンの数は、ひきのばしの相対的ながさをしめす。
-	直前の語の中断をしめす。
.	直前部分が下降調のイントネーションをもつことをしめす。
?	直前部分が上昇調のイントネーションをもつことをしめし、疑問表現であることをしめす。
,	直前部分が下降調でないイントネーションをもつことをしめす。
/	直前部分が上昇調のイントネーションをもつことをしめし、疑問表現ではないことをしめす。
↑	直前部分が、極端な上昇調のイントネーションをもつことをしめす。
!	直前部分が、つよい断定調をもつことをしめす。
—	アンダーラインをほどこしたぶぶんが、つよく発話されていることをしめす。
hh	呼気音をしめす。おおむね、笑い声をあらわす。h の数は、連続の相対的ながさをしめす。
.hh	吸気音をしめす。h の数は、連続の相対的ながさをしめす。
XXX	当該部分が聴き取り不可能であったことをしめす。
G—>	上段の発話者（非発話者のばあいもある）の視線が、> 部分までのあいだ、アルファベットでしめされた参与者（もしくは物体や方向）にむけられていることをしめす。なお、(off)は、画面に映っていないため、視線が確認できないことをあらわす。
()	括弧内の動作がおこなわれたことをしめす。括弧の開始位置は、上段の発話の当該の箇所、括弧内の動作が開始されたことをしめす。
cam	当該シーンを撮影しているビデオカメラをしめす。

さて、福島(2004a)で考察したごとく、コミュニケーションは社会的で、相互行為的に達成される。コミュニケーションの参加者は、その場における言語的もしくは非言語的リソースを活用しながら、練達した踊り手のように、なめらかにからみあいながら会話をすすめていく。まず以下にその例をみたい。

(1) 【Truc】^{viii}

- 1 L : =Et en fait c'est pas moi qui coude ce, mon bouton
 (off)—————
 avec une allumette, c'est une amie [qui a l'habitude
 —————>
- 2 S : [Votre grand-mère
 (off)—————>
- 3 L : Non non. [Ça c'est une amie qui a, de surcroît n'est
 (off)—————>下—————>cam—————
 pas une vieille dame .hh hhh, m'a donné ce truc pour
 —>S—————(笑)—————>cam—————>
 coudre les boutons.=
 下—————>
- 4 S : [Ah
 (off)—————>
- 5 L : =Moi je suis [pas une couturière vraiment affirmée,
 S—————>(cam)
- 6 S : [Hmm
 (off)—————>

まず、Lが1行目で「c'est une amie」といった時点で、すかさずSが「Votre grand-mère」とつづけ（そのため、Lの後続の発話とオーバーラップしてしまっている）、ただちにLが否定している（3行目冒頭）。この否定にたいし、Sはなるほどというように「Ah」という反応をしめしている（4行目）。このときLの顔は画面に映っていないのだが、この3行目のLの否定はあきらかにSにむけられたものであり、それをたしかにSはキャッチしているのだといえよう。

そして、その後、Lはまずいっしゅんしたを、ついでカメラのほうをむきながら、「それはひとりの友人で、さらに、おばあさんじゃないんだけど」とつづけるのだが、この「おばあさん」「une vieille dame」のところでSを見やり、笑ってしまう。もちろん、そのまえでSがいった「あなたのおばあさん」たいする、あらためての否定のディスプレイである。

さらに、5行目では、LはSにむかって話しはじめるのだが、Sのあいづち「Hmm」は、そのアクションにむけられているとかがえられる。しかもこのあいづちは、統辞構造的には、なんの情報もあらわれないぶぶん「わたしは」「Moi je suis」ですでに出現しており、発話裡のなんらかの《意味》にたいするあいづちではなく、LがSのほうをむいたことにたいするリアクションとみなせる。この例からも、コミュニ

ケーションの場の参加者は、たがいの存在を発話のなかにおりこみながら、会話をすすめていくことがよくわかるであろう。

また、(6)は、発話そのものが協働的に構築されている例である。

(2) 【Yonne 1】^{ix}

(宿泊した民宿の浴室に電気がないのはふつうかと A がたずねたのにたいし、民宿の主人夫妻が反論している)

1 V : Parce que vous lisez dans votre baignoire./

A—————(左手でAをさす)—————>

2 D : (hhh)

A(笑)->

3 A : Non mais j'aime bien savoir où je suis. (hhh)

V—————>G—————(笑)->

4 G : **Et en allumant et en allumant**

A——(右腕を宿の方へのぼす)——

[le lavabos, ça va pas ?

—————>

5 V : **[En allumant le lavabos, ça suffit pas ?=**

A—————>

6 D : =Le plafonnier.

A—————>

7 A : Si. C'est mieux que rien. (.) Mais c'est bien d'avoir

G—————

une lumière dans la douche.

—————(右腕を頭に)->

浴室に電気が必要なのは読書するためだろうといわれた A は、それを否定して、じぶんの位置を知っておきたいためだという。それにたいして、G は身ぶりもまじえつつ、トイレの電気をつければよいのではないか、というのだが (4 行目)、このとき、G の « Et en allumant et en allumant » というくりかえしをうけるように、そのいちどめの « En allumant » のあとに V が « En allumant » とつづけ、以降、G の発話をトレースするかのように——さいごのフレーズのみが異なるが——発話をかさねていく。さいごには、D も、V のせりふにつづけて「天井灯」ということばを発している (6 行目)。この、三者による、A を見ながら発せられた発話は、ちょうど以下のように、一連の発話としての形をもっている。

(3) G : Et en allumant

V : le lavabos, ça suffit pas ?

D : (C'est) Le plafonnier.

このことは、これが、一連の発話を、三者が協働して構築した例であるといえるのではなかろうか^x。そして、このてんでは、つぎの例も同様のものとみなしうる。

(4) 【Yonne 1】

- 1 G : Donc, vous n'êtes pas loin du fameux CES Pailleron ?
A—————>
- 2 A : Il y en a partout.
G—————>
- 3 G : (...) Non mais **Paille[ron]**, ça vous dit [rien Pailleron].
A—————>
- 4 V : [Non **Pailleron**
A—————>
- 5 D : [Pailleron c'est,
A—————>
il a brûlé, des, il y a des enfants qui ont été tués.
A—————>

このばあい (3~4行目)、Gの発話「Non mais Pailleron」につづけてVが「Non Pailleron」とほぼおなじ形式の発話をおこなったあと、間髪容れずにDが「Pailleron c'est」と説明の発話をおこなっている。この一連のAにむけられた発話も^{xi}、やはり協働によるものといえよう。

さらに、共発話者が、同時発話をおこなうことによる協働もある。

(5) 【Lyon B】^{xii}

- 1 D : Euh « Alors, tu aimes les manga ? » « Oui::.. »
R—————>机—————>
- 2 M :
机(笑)→
- 3 D : « et tu aimes les jeux vidéos ? » [« **Oui::..** »
R—————>
- 4 G : [« **Oui::..** »
机—————>(笑)
- 5 D : « T'aimes les arts martiaux ? » « Oui::.. » « T'aimes le
R 方向—————>
Japon quoi ? » [« **Ouais, ouais.** »
—————>
- 6 GM : [« **Ouais.** »
机—————>(笑)
- 7 D : « Bien, (0.5) [ben, super. »

R 方向—————>

8 A : [Oh, les stéréotypes, les gars.=

D—————>正面下—————>

1行目で、Dが、日本語科に登録する学生のステレオタイプを、「ひとり対話」によってしめしている。それにたいして、3行目でおなじシンタックスの「問い」のぶぶんの発話をディスプレイしたところ、その「答え」のぶぶんをひきうけ、かつ1行目のDの発話をなぞるかっこうで、Gが«Oui»と発話している。だが、Dも発話しているので、結果的に、串田(2006)の提唱する「ユニゾン」^{xiii}となっている。その後、5行目においてDがすばやく「対話の模倣」をおこなったのち、みたびディスプレイした「問い」にたいして、GとMが「答え」をDの発話にかさねるようにユニゾンとして発話している。これはDの発話を「対話の模倣」をおこなっているものと承認し、そのように「つくりなす」行為であるとうじに、それを「補強」するものであり、かつ、「共同」で発話をなしている状態でもある。これも発話構築における協働の例といえよう。

さらに、つぎの例では、2行目のSの«la voilà»は——Lじしんの«Voilà»とオーヴァーラップしてしまっているが——1行目のLの「針をひきだす」という行為を「描写」している。

(6) 【Truc】

1 L : Et on repasse le fil. Hop. Attendez. Voi[lâ. Et puis la] les=
 (off) (針を通す)—————(針をひきだす)—————>

2 S : [Alors, la voilà].
 (off)—————>

3 L : =couturières on fait comme ça::
 (off)————(糸を巻く)————>

かくして、Sの発話は、謂わば「Lの行為とのユニゾン」になっており、非言語行為と言語行為の協働的達成の例とみなせよう。

さらに、この例の、«la voilà»におけるlaは女性単数名詞をうける直接目的の代名詞であり、l'aiguille(針)をうけているとかんがえられるが^{xiv}、じつはこのaiguilleという語は、1分44秒のこのコーパス中、34.5秒あたりでSにより発せられたのち、このSの«la voilà»の発せられる1分25秒付近までに発せられることはないため^{xv}、このlaは先行文脈内に先行詞をもたない——すなわち「前方照応」ではない——とかんがえられる^{xvi}。したがって、この発話は、コミュニケーションの現場における、まさに「その場的」な協働のアイテムとして機能していると指摘できる。

2-2 《意味》の協働的構築

ことばの「指示」が「その場的」なものであるということは、ことばの指ししめす《意味》もまたそうであることを示唆する。そもそも福島(2004a)にも論じたように、「交通標識」のような記号性にあふれたものでさえも、「記号」として機能するためには、それが使用される場の「コンテキスト」——と、発信者-受信者間の相互行為——が必要であった。とうぜん、ことばの《意味》というものも、その使用される場というささえがなければ「確定」できないはずである。じっさい、つぎの例では、«le saké»という発話形態が、

たんなる「アルコール類の一種」といった程度の解釈ではなく、まさに「日本酒」という《意味》を獲得しているのは、このシーンの撮影者である「日本人」のほうをむいて発話するというディスプレイがおこなわれた結果なのだ。そしてこのこともまた、コミュニケーション場の参加者とのコラボレーションの一種といえよう。

(7) 【Yonne 1】

- 1 G :
Vの手元のコップ(Vにワインをつぐ)→
- 2 V : Merci !=
手元のコップ→
- 3 G : =Voilà.
壺(壺をおく)→
- 4 G : (...) [Le le saké ça sera pour tout à l'heure.
→cam(右手をまわす)→
- 5 D : [XXX
正面→cam→
- 6 全員 : hhhh
(笑)→
- 7 A : Vous avez du vrai saké japonais ?
G→
- 8 D : (.) Non.
正面→
- 9 V : Non.
正面→
- 10 D : C'est une plaisanterie.
(Aにむきながら)A→
- 11 A : (...) J'adore le saké.
正面→

この、4行目のGの「日本酒はじきに」という発話が「日本人にむけたもの」としてつくりなされたことは、その後のコミュニケーションの場のメンバーの「笑い」(6行目)によって「承認」され——さらに厳密に言えば、メンバーの「笑い」というリアクションによって完成させられ——ている。また、このときに「日本」という《意味》が明示的に話題になったということは、つづく7行目のAの「ほんとの日本の酒があるんですか?」という発話において、彼女が付した「日本の」japonais という形容詞の明示的表出によっても裏づけられているといえよう。

つぎもまた、《意味》と「指示」の協働的達成の現場をしめしている例である。五人の男子学生が机にむかってすわっており、昼食の話をしているところで、インスタント・ラーメンが話題となっている。

(8)

【Lyon B】

1 R : On va aller manger.

正面—————>

2 D : T'habites où ?

G—————>

3 G : À la Guillotière.

正面—————>G->

4 D : Oh c'est pas lo[in.

G—————>

5 G : [En face de la fac.

D—————>

6 D : Oh, ben tu passes au quartier chinois, t'achètes un

G—————

paquet de nouilles à 2 francs, **les Cup Noodle** et puis::

—————>

7 A :

正面(項突く)D——>

8 G : Ouais mais bon.=

正面(身をゆすり、甲高い声で)——>

9 D : =Tu fais chauffer de l'eau.

G—————>

10 G : On fait des économies.

正面(甲高い声で)——>

11 D : (1.5) Oah 2 francs (..) toutes, 2 francs tout compris.

G—————>

12 G : 2 francs pour ?

D(咳。右拳を口に)->

13 D : 2 francs [**les les**

G—————>

14 M : [2 ou 3 francs [**un sachet**, [les petits

G—————>(両手で四角をつく

sachets

る)手元——>

15 D : [2 3 francs **les:: les sachets**

G—————>M->G—————

de nouilles

—————>

16 A : [Ouais **les sachets là**

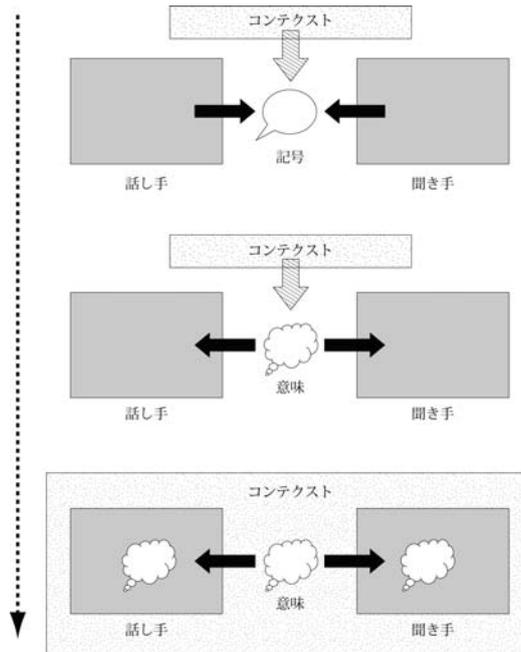
13 行目と 15 行目の発話に注目したい。まず、13 行目において D は、12 行目の G の間にこたえようとしている。だが、名詞本体があらわれず、定冠詞をくりかえしている。D が名詞をなんと発話すべきか逡巡していることは、15 行目の「2、3 フラン」のあとで定冠詞の語末の音をひっぱっていることからあきらかである。そして、けっきょく、D の 13 行目の発話にオーバーラップするかたちで発話されている M のことばをヒント——もしくは、引き金^{トリガー}——として、M の発話した単語を採用するかたちで、「sachets」と発話している。このとき、その単語の発話にひかれるように、いっしょに M のほうをみる（D は G と M のあいだにすわっており、G のほうをみていた D が M をみるためには、ふりかえらねばならない）。だが、D は 6 行目の時点では、les Cup Noodle と発話していた。にもかかわらず、13 行目でいいよどんでいるということは、この Cup Noodle という「名称」にたいして疑念があったということのようにみえる。また、この sachet という語には、16 行目で A も同意を表明しており、この場では受けいれられたようにおもわれる。

この一連の発話がしめすものは、つぎのようにまとめられよう。すなわち、D によってその指示対象にかんするいわば「存在の可能性」がしめされる。それを M の発話が補完し、D が採用することで、この場における当該の《意味》——すなわち「袋入りインスタント・ラーメン」——が「指定」され、A による「同意」をへて、最終的にそのような《意味》をしめすという「指示」が「確定」されたわけである^{xvii}。

伝統的なコミュニケーション・モデルにしたがえば、D が脳裡もしくは心裡に想定していた指示対象にたいして、いかなる名称をあたえるべきかなやんだだけであって、指示そのものは、発話開始以前に「確定」していたという説明が可能である。しかしながら、この「袋入りインスタント・ラーメン」という《意味》と、それにたいする「指示」が、コミュニケーションが展開されている「文脈」にあわせ「その場的」に構築されたものであることは、sachet という名詞の「恒常の意味」とでもいうべき「辞書の意味」が「ちいさな袋」であることからあきらかであろう。

かくして、《意味》というものは、これまでわれわれが論じてきたように（福島 2000, 2004a, 2004b, 2004-5, 2006）、相互行為によって協働的に構築されるものであるといえる。このことを、コミュニケーション・モデルとしてしめすならば、(9)のよう描きうるであろう。

(9) コミュニケーションの相互行為モデル^{xviii}



2-3 シンタックスの協働的構築

通常「名詞句」というものは、シンタックス構造上はなほだ緊密な「ユニット」をなしている。ことに限定詞 *déterminant* と名詞とのあいだの「緊密さ」は、このあいだにおけるリエゾンが「義務的」であることから支持される^{xix}。にもかかわらず、(8)の例においては、13行目のような「冠詞のみの発話」がみられた。このことは、ちょうど日本語において、助詞が、先行する名詞句と緊密なシンタックス上の単位をなしているにもかかわらず、(10)の4行目のように、助詞から発話（ターン）を開始することが可能であるのとおなじ現象であろう。

(10) 【テレフォンショッキング 7】^{xx}

1. T : 見て で あ 組んで あの 救助のとき 組んでやらなきゃいけないんだよね
M—————(両腕を前に、なにかをにぎるふり)—————
[XXX
——>
2. M : [はいはいはいはい
T(うなづき)——>
3. T : ひとりが運転して ひとりが こう::
M(ジェスチャー)->正面—(竿をにぎり、ひきあげるジェスチャー)->
4. M : が助けるみたいな=
正面斜前(体右で両腕ですくいあげるジェスチャー)->
5. T : =助けるん- やんなきゃいけないん- 共同作業もあるんだよね
正面——>M—————(右手を上下)—————>
6. M : あるんですよ::
T(うなづき)——>

ここでは、3行目のTの発話のときれ——「いいなずみ」がみられる——にたいして、Mが補完するかつこ

うで、「が」という助詞からはじまる発話をおこなっている^{xxi}。ここでは、発話のみならず、TのジェスチャーもまたMのジェスチャーによって補完されていることで、いわば「協働性」がよりはっきりと認められているが、このように、発話は、シンタクスのレベルにおいてさえも、コミュニケーションの参与者間の協働によっても完成されることがわかる。(8)にみられた冠詞で終了している発話も、じつは、この冠詞を付されるべき「名詞」ぶぶんが、コミュニケーションの参与者たちにむかって、いわば「オープン」であることをしめしているといえよう。じじつ、(11)のように、名詞ぶぶんがほかの参与者によって補完・完成されるケースもある。

(11) 【Lyon B】

- 1 D : Ah [par contre c'est de la grande cuisine là, tu
G—————
verras euh:::
—————>
- 2 R : [C'est dingue !
D->正面—————>
- 3 D : C'est des nouilles, des (.) [nouilles XXX
G——(首をふる)—————>
- 4 M : [C'est facile à préparer hein/.
正面—————>D—————>
- 5 G : Ouais ouais **c'est des des des des** [des
M—————>
- 6 R : [Non mais c'est vrai,
G—————>下—————
c'est bien.
—————>
- 7 D : **Des Cup Nood-**, ben tu vois les trucs [Maggi:::
G—————>
- 8 G : [À base de riz en fait ?=
M—————(右の親指と人差し指をこする)->
- 9 M : =Tu mets juste de l'eau.=
G—————>
- 10 G : =Ah oui mais j'en ai ça.
D(左人差し指でさし、左手を額に)->
- 11 D : Non c'est même pas de la pâte de riz non, c'est:::
M—————>G—————>
C'est pas des cheveux d'ange, c'est des des nouilles
G—————
euh classiques quoi, au blé.=

24

—————>

ここでも、D が、G の « C'est des des des des des » という「いいなずみ」を補完するかどうかで、あいだに R の発話をはさみつつも、「Des Cup Nood- » と発話している^{xxii}。そしてこの発話が、協働的に「シンタックス的に完成した文」を構築する行為であることは、D の G にたいする視線により、この場の参与者たちには明白なじじつなのである。

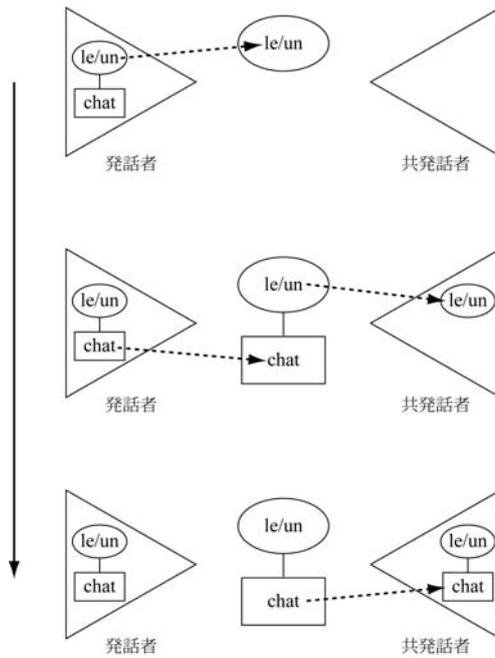
3 名詞句の相互行為的コミュニケーション図式

これまでシンタックスの協働性を指摘してきた Lerner や串田らも、発話のターン・ユニットは「その場的」に構成されていくという立場をとってきた。にもかかわらず、シンタックスそのものについては、コミュニケーションにさきだつア・プリアリな存在であることを要請している。すなわち、彼らにとって、シンタックスとは、ターン・ユニット構成のための「既存」のリソースにすぎないのである。しかしながら、うえにみてきた会話から考察されることは、統辞構造もまた相互行為のなかでいわば「確定」されるものであり、「その場的構築物」だということである。このてんにおいて、われわれの論は彼らと袂をわかち、独自の道をあゆむことになる。以下では、フランス語の名詞句が、コミュニケーション以前に存在するものではなく、コミュニケーションの発話者—共発話者間において協働的に構築され、最終的に「共有」されるという立場から、その過程を図式化することで、ア・プリアリに要請するかんがえかたとのちがいをしめしたい。

まず、「伝統的コミュニケーション図式」によれば、伝達される内容は、コミュニケーションにさきだつて発話者の内部に存在しているとかんがえられている。その内容が、ひとまずコミュニケーションの場に提出され、それを共発話者がとりこむかどうかで、最終的に伝達内容、すなわち《意味》が共有されることになる。

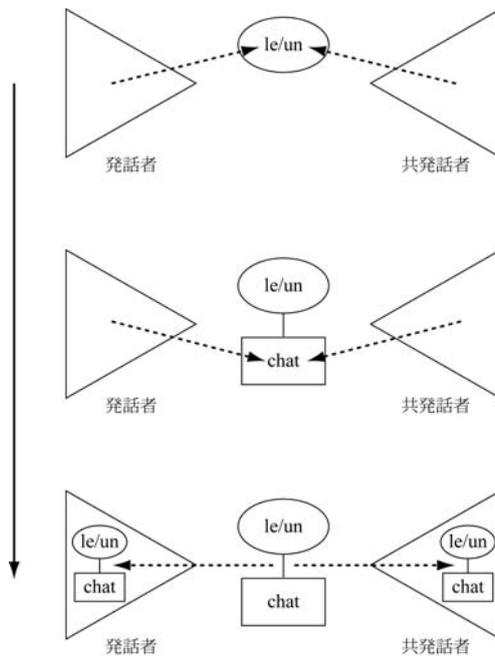
このことを名詞句のレヴェルでかんがえるならば、発話者の内部にある名詞句——たとえば *le chat* ——が、コミュニケーションの場にしめされる。その際、言語の線状的な性質により、ひとまず冠詞が発話され、共発話者はそれを認知する。ついで、その冠詞に名詞が後置され、ひとつの名詞句として完成するとともに、共発話者の内部にも伝達され、発話者と共発話者のあいだでの「共有」が達成されるのである。これを図式化するとつぎのようにあらわせよう。

(12) 名詞句の伝統的コミュニケーション図式



これにたいし、(9)でしめしたようなコミュニケーションの相互行為モデルにしたがえば、すべてはコミュニケーションによってたちあられわるのであり、それがなんであるかという事は事後的ア・ポステリオリにしか認識されない。したがって、それはつぎのように図式化される。

(13) 名詞句の相互行為モデルによるコミュニケーション図式



この図式は、冠詞も名詞も、コミュニケーションの場に提出——これをになうのは、もちろん発話者であるが——されてはじめて、それぞれ「冠詞」という文法範疇、「名詞」という文法範疇であるという、いわば発話者—共発話者間の「共通理解」がア・ポステリオリに成立し、その時点ではじめて当該語句としての「認

知」をうけ、「成立」するということをしめしている。そして、その名詞句がなにを《意味》し、なにを「指示」するのかということもまた、コミュニケーションの現場において協働的にあきらかにされ、結果的に、当該名詞句が、発話者-共発話者間で「共有」されたとみなされるわけである。

コミュニケーションとは「一方的」なものではもちろんなく、「双方向的」なものであった。しかしその「双方向的」というのは「協働的」ということであり、それは《意味》の生成のみならず、シンタックスのレベルにおいてさえみられるものなのだ。

なお、このかんがえかた、すなわち徹底した構築主義的観点にたった名詞句以外の統辞構造の検討や、ルーマニア語のように冠詞が後置する言語との比較研究、日本語のように助詞にたいして名詞が前置される言語との対照研究など、今後の研究課題はさまざまかんがえられよう。だが、言語分析・相互行為分析の要諦は、つねにじっさいの相互行為のさまざまなすがたを虚心に分析することにある。したがって、われわれのなすべきことは、今後とも多数のコーパスをみつづけるという、ごくあたりまえのことに収斂するのである。

【参考文献】

- 上野 直樹・西阪 仰 2000 『インタラクション——人工知能と心』大修館書店。
- 串田 秀也 2002a 統語的単位の開放性と参与の組織化(1)——引き取りのシークエンス環境——、『大阪教育大学紀要』第II部門 50-2,大阪教育大学: 37-64.
- 串田 秀也 2002b 統語的単位の開放性と参与の組織化(2)——引き取りにおける参与の交渉——、『大阪教育大学紀要』第II部門 51-1,大阪教育大学: 43-66.
- 串田 秀也 2006 『相互行為秩序と会話分析——「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化——』世界思想社。
- 須賀 あゆみ 2006 相互行為としての指示: 日本語の会話における指示対象の認識を確立するプラクティス、『奈良女子大学文学部研究教育年報』3, 奈良女子大学文学部: 63-73.
- 西阪 仰 1996 対話の社会組織, 『言語』25-1, 大修館書店: 40-47.
- 西阪 仰 1997 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』認識と文化 13, 金子書房。
- 西阪 仰 2001 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店。
- 東郷 雄二 1998b 談話モデルと指示, 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』平成7~9年度科学研究費補助金基盤研究©研究成果報告書
- 東郷 雄二 1998c 談話モデルと指示——指示対象はいかに確立されるか——, 日本フランス語学会第170回例会口頭発表ハンドアウト。
- 東郷 雄二 1999 談話モデルと指示——談話における指示対象の確立と同定をめぐる——, 『京都大学総合人間学部紀要』6, 京都大学総合人間学部: 35-46.
- 東郷 雄二 2000 談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア, 『京都大学総合人間学部紀要』7, 京都大学総合人間学部: 27-46.
- 東郷 雄二 2001a 定名詞句の指示対象同定のメカニズム, 『フランス語学研究』35, 日本フランス語学会: 1-15.
- 東郷 雄二 2001b 定名詞句の「現場指示的用法」について, 『京都大学総合人間学部紀要』8, 京都大学総合人間学部: 1-17.
- 東郷 雄二 2002 フランス語の不定名詞句と総称解釈, 『京都大学総合人間学部紀要』9, 京都大学総合人間学部: 1-18.
- 林 誠 2005 「文」内におけるインターアクション——日本語助詞の相互行為上の役割をめぐる——, 串田秀也・定延利之・伝康晴 編『活動としての文と発話』シリーズ文と発話 1, ひつじ書房: 1-26.
- 福島 祥行 2000 《意味》の本質と生成過程——相互行為論の観点から——, 『人文研究』52-10, 大阪市立大学文学部: 19-36.
- 福島 祥行 2004a 記号・標識・相互行為——構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(1)——, 『人文研究』55-6, 大阪市立大学文学研究科: 9-21.
- 福島 祥行 2004b 冠詞・指示・知識——相互知識のパラドクスと相互行為——, 『森本英夫先生古希記念『周辺』『TLLMF』合併号』, シメール社: 61-74.
- 福島 祥行 2004-5 こぼれる気持ちと伝わることば, 1-12, 『ふらんす』白水社。
- 福島 祥行 2006 独我論と普遍性の構造——構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(2)——, 『人文研究』57, 大阪市立大学文学研究科: 165-180.
- 本多 啓 2001 文構築の相互行為性と文法化, 『認知言語学論考』1, ひつじ書房: 143-183.
- LERNER, Gene H. 1996 On the "semi-permeable" character of grammatical units in conversation: Conditional entry into the turn space of another speaker, in E. Ochs, E. A. Schegloff, & S. Thompson (Eds.), *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press: 238-276.
- LERNER, Gene H. 1991 On the Syntax of Sentences in Progress, in *Language in Society*, 20, Cambridge University Press: 441-458.
- LERNER, Gene H. 2002 Turn-sharing: the choral co-production of talk-in-interaction, in C. Ford, B. Fox & S. Thompson (Eds.), *The Language of Turn and Sequence*, Oxford University Press: 225-256.

- LERNER, Gene H. 2004a On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: Grammar as action in prompting a speaker to elaborate, in *Research on Language and Social Interaction*, 37(2): 151-184.
- LERNER, Gene H. 2004b Collaborative Turn Sequences, in G.H. Lerner (Ed.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, John Benjamins: 225-226.
- SACKS, Harvey, SCHEGLOFF, Emanuel A. & JEFFERSON, Gail 1974 A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, in *Language*, 50 (4): 696-735.
- TRAVERSO, Véronique 1999 *L'Analyse des conversations*, coll.128, Nathan.
- TURING, Alan 1950 Computing Machinery and Intelligence, in *MIND*, vol. LIX, no. 236, Oxford University Press: 433-60, [Online Available: 2008/09/01] <http://www.turingarchive.org/browse.php/B/9>
- WITTGENSTEIN, Ludwig 1953 『哲学探究』 ウィトゲンシュタイン全集 8 [藤本隆志], 大修館書店, 1976.
- WITTGENSTEIN, Ludwig 1953 *Tractatus logico-philosophicus suivi de Investigations philosophiques*, [Pierre KLOSSOWSKI], tel, Gallimard, 1961/1986.

-
- i このことから、会話分析をおこなう研究者たちのおおきは、「文」という語をもちいず「ターン構成単位」turn-constructive unit (TCU) という術語をもちいている。
- ii どうぜんのことながら、社会学者や心理学者たちの関心は言語学者のそれとは異なっている。彼らの関心は「コミュニケーションの参与者たちによる発話のターンがいかにか構成され、そのとき、そこで社会的に生じている事態はどのようなものか」ということに集中する。だが、われわれ言語学者は、同様の問題意識と立場を共有しつつも、そのとき言語レヴェル、とりわけシンタクス・レヴェルではなにが生じており、また、シンタクス・レヴェルにおいて、いかに相互行為論的構築がおこなわれているか、ということに関心をいさぐ。このことが、先行諸研究とわれわれの研究のおおきな相違点となるであろう。
- iii チューリングは、このテストを、「機械はかながえることができるか？」という問いにかかわるものとして提示した (Turing 1950)。
- iv エディソンは、職業ごとにもちいられる語彙は、せいぜい 100 語程度であるものべている。
- v このようなプログラムは chatterbot ——もしくは chatbot——、日本では人工知能をもじって「人工無脳」とよばれている。
- vi 独我論的世界観とコミュニケーションの関係の批判的検討については福島(2006)を参照。
- vii そもそも、「おれはなにをしてるんだ」という独白でさえ、じぶんという「他者」に聞かせるための発話である。
- viii *Trucs: Bouton et allumette* (1991) CIRNEA [PICS The University of Iowa]
L: Laura Fronty (chroniqueuse de *Télématin* <Magazine de France 2>)
S: Sophie Davant (animatrice de *Télématin* <Magazine de France 2>)
- ix 2000/07/02, Yonne で収録。4名の男女が、屋外の丸テーブルをかこみ、酒をのんでいる。
G (民宿の主人、70 歳)
V (その妻、52 歳)
D (客、60 歳)
A (その娘、31 歳)
- x V の発話は、「おくれたユニゾン」とも解釈できる。「ユニゾン」にかんしては、串田(2006)を参照。
- xi これらの発話が A にむけられていることは、G、V、D の 3 人とも、視線が A にむけられているところからあきらかである。
- xii 2000/11/15, Lyon で収録。5 人の男子学生が机にむかってすわっている。
M (学生、22 歳)
D (学生、25 歳)
G (学生、23 歳)
A (学生、18 歳)
R (学生、19 歳)
- xiii 発話が結果的にかさなってしまった「オーヴァーラップ」と異なり、「ユニゾン」は、謂わば「意図的の同時発話」である (cf 串田 2006)。
- xiv なお、「la voilà」は「ほら、それ(la)があらわれた」と和訳することができるが、もっと間投詞的なものとも解せる。
- xv ちなみに、このコーパス中、*aiguille* という語の発話は、この一回のみである。
- xvi いわゆる「現場指示」のケースであるが、人称代名詞の指示は、定冠詞同様、直接「個体」を指示しないとかがえられる (cf. 東郷 2001b)。
- xvii このとき、*les sachets* という定名詞句における定冠詞は、話し手と聞き手にとって「名称・類概念」を導入するマーカーとしてのステータスを、その場的に獲得したのだといえよう。
- xviii これは福島(2006)で提案した図式を改訂したものである。
- xix 現代フランス語のリエゾン *liaison* には「義務」「禁止」「任意」の三種類があり、プロソディー上の単位でもある「リズム・グループ」(「リズム段落」ともよばれる)内では、リエゾンは「義務」的であり、リズム・グループをまたぐリエゾンは「禁止」とされている。たとえば、*Les étudiants anglais ont étudié le français.* における *les* と *enfants* のあいだおよび *ont* と *étudié* のあいだが前者であり、*anglais* と *ont* のあいだは後者である。なお、*étudiants* と *anglais* のあいだのリエゾンは「任意」とされる。
- xx 2003/06/11 『笑っていいとも!』
T = タモリ (司会者)
M = 松岡充 (ゲスト)
- xxi なお、日本語助詞の相互行為的研究には林(2005)があるが、そこでとりあつかわれている例は、ひとりの発話者が、みずからの先行発話に、しばしの挿入発話ののち、助詞を接続するというものであり、うへの例のように、共発話者

の発話に接続する「協働」の例ではない。

- xxii ただし、Dの発話をおってみると、3行目では「des nouille」と発話したうえで、なおいいなずむ態度がみられ、さらに、7行目では、「カップ・ヌードル」をさいごまで発話せず、「マギーのやつ」(les trucs Maggi)というあたらしい「インスタント麺」を導入している。そして、11行目でも、Gの「米でできた」という発話(8行目)を否定しつつも、「c'est::」や「c'est des des nouilles euh classiques quoi」という発話のありかたに、その麺をなんと名指すべきかについての逡巡がみられる。